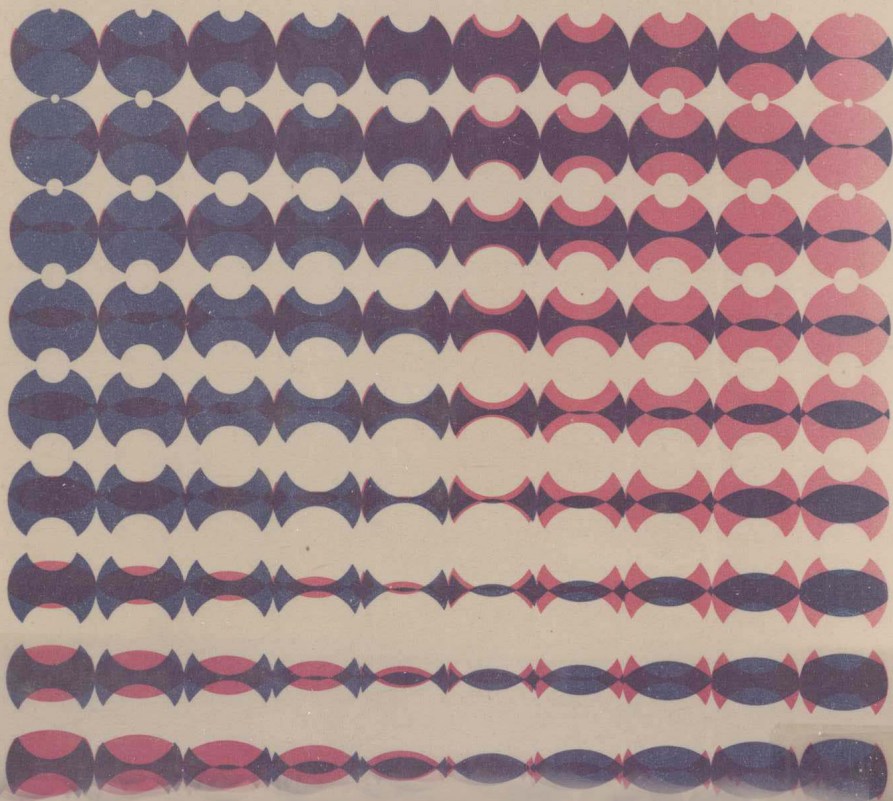




現代詩文庫

65

吉行理恵詩集



思潮社

現代詩文庫 85 吉行理恵

発行 ・ 一九七五年十月三十日

著者 ・ 吉行理恵

発行者 ・ 小田久郎

発行所 ・ 株式会社思潮社

東京都新宿区市谷砂土原町三―十五

電話東京(二六七)八一四一 振替東京八一二一

印刷 ・ 株式会社文唱堂

製本 ・ 岩佐製本所

1392 - 101065 - 3016



現代詩文庫

吉行理恵詩集

思潮社

現代詩文庫

65

吉行理惠・目次

詩集〈青い部屋〉全篇

青い部屋 ・ 12

十七歳の弟がいう ・ 13

苛^{いら}だつ その一 ・ 13

苛^{いら}だつ その二 ・ 14

しるし ・ 14

風のように ・ 15

この害虫^{むし}だけは…… ・ 17

海の水にしみいるように ・ 18

脱殻^{ぬけがら} ・ 18

一にぎりの風 ・ 19

黒いゴムマリの歌 ・ 20

緑色の虫 ・ 20

蒼ざめた犬 ・ 21

きっかけ ・ 21

つり船に ・ 22

むらさきの ・ 23

ある会話 ・ 23

詩集〈幻影〉全篇

幻影 ・ 25

靴に釘がささっていても…… ・ 25

改札口で ・ 26

そして とび出ていったから ・ 27

波打際 に ・ 27

幻影 ・ 28

鎖 ・ 29

春 ・ 29

朝 ・ 30

梨の花の揺れた時 ・ 30

閉められた扉の前で ・ 31

もう だれもないのに ・ 31

悲歌 ・ 32

希望 ・ 32

髪をひっぱられて ・ 33

明け方 ・ 33

見えなくなってしまったので ・ 34

私は冬枯れの海にいます ・ 35

風が吹いている夜は ・ 36

足の裏が冷たかったから ・ 36

詩集〈夢のなかで〉全篇

夢のなかで ・ 37

墓場で ・ 38

怖れ ・ 38

星が流れて行ったなら…… ・ 39

悲歌 ・ 40

空の何処かに隠れていて…… ・ 40

献花 ・ 41

オルガンのある家 ・ 41

名前を呼ばれて ・ 42

夢 ・ 42

鉄格子のある ・ 43

秋の葬式 ・ 44

都会の空で ・ 44

月見草 ・ 45

壊れた外燈 ・ 46

波の戯れ ・ 46

海の夜明けから真昼まで ・ 47

初春 ・ 47

早春 ・ 47

生贄 ・ 48

祈り ・ 48

夢の繭 ・ 48

水の姿 ・ 48

海の精 ・ 49

遊泳禁止区域 ・ 49

休止符 ・ 49

真紅な襟巻 ・ 49

〈吉行理恵詩集〉全篇

夢の月の春 ・ 50

部屋の中に住んで居る月 ・ 51

小夜曲を奏でる道化師 ・ 51

横たわる道化 ・ 52

夢 ・ 52

春 ・ 53

昼の月 ・ 53

空の扉 ・ 53

悲劇の主役ですから ・ 53

星は瞬かない ・ 54

綱渡り ・ 54

羊を抱いて ・ 59

光を浴びて笑う ・ 60

道化の鳥 ・ 61

白い鳥の消えた場所 ・ 61

寒い 三篇 ・ 62

運ぶ 三篇 ・ 63

重い 三篇 ・ 63

未刊詩篇

鳥の降りて来た時 ・ 64

圧死 ・ 64

月はコンクリートの道に落ちて ・ 64

月の姿の視えてくるまで ・ 65

夏 ・ 66

街 ・ 66

昔 ・ 66

塗り籠める ・ 67

まるい池 ・ 67

猫の一日 ・ 67

流れ星 ・ 68

隨筆

＊詩人のこと

- 立原道造について ・ 70
立原道造のこと ・ 74
萩原朔太郎にあずけた猫 ・ 76
注文の多い料理店のことなど ・ 80
想い出の一冊 ・ 82

＊猫のごと

- 愛玩動物売場 ・ 84
私と猫のこと ・ 86
ミイ子 ・ 90
ロ〜 ・ 91
葉子 ・ 92

雲 ・ 93

＊本のこと

- 井上靖詩集『運河』 ・ 95
吉田知子『生きものたち』 ・ 96
マルソー『クリージー』 ・ 98
ジルベール・ガヌ『わが愛する猫の記』 ・ 100
トーベ・ヤンソン『彫刻家の娘』 ・ 103
ポール・ガリコ『モルモットからきたてがみ』

小説・自伝

- 記憶のなかに ・ 108
背中の猫 ・ 130

作品論

吉行さんの詩 Ⅱ 栗津則雄 ・ 142

詩人論

「吉行理恵さん」 Ⅱ 虫明亜呂無 ・ 150

装幀 Ⅱ 国東照幸

詩
篇

青い部屋

わたしは青い部屋の中です

雨戸に叩きつけるのは雨の音でなく

気の狂れたばあさんのわめき

へむすこをかえせ　むすこをかえせ」と

わたしの壁にぶつかるから

かたく雨戸をしめて

わたしは青い部屋の中です

息子は帰って来ないのでしょうか

かくした女は　わたしではないのです

何故なら青い部屋はひとりしかはいれないから

ここはどこまでも青く

柩もなければ　隠れもみあたらないのです

むすこは青い色を好きでした

青い月をみつめているのが好きでした

いつのまにか青い月とむすこは

あいしあってしまったのです

けれども喉がからかな夜

たまらなくてむすこは青い月をかじったのでした

だからむすこの青い月はもうのぼりません

しらせてよこしたのは

タンポポが咲いたこと　そして風が……

だからほんのすこし　雨戸をあけたのです

外には気の狂れたばあさんが立っていたのです

わたしをみつめるために　立っていたのです

わたしは青い部屋の中です

昔　白い指でピアノたたいたその人は

わたしの雨戸を叩きます

へむすこをかえせ　むすこをかえせ

十七歳の弟がいう

十七歳の弟がいう

へ雪の中で死にたいと

二十二歳のわたしはいう

あんたにはにあわないと

十七歳の弟がいう

へダンブカーにはねとばされて

そして死ぬのがにあうようでは

とても生まれたかいないから

雪の中で死ぬるように

死んでもにあうように

生きていて

死ぬまでにあわなければどうしようか

すきなようにするがいいと

二十二歳のわたしはいう

苛^{いら}だつ　その一

赤ん坊が泣いています

母親は　叫んでいます

月にむかってわめいています

へみんなおまえのせいなのと

へなんだかきにいらないうたら

赤ん坊が泣いています

母親は　叫んでいます

それで月は　ころならずも

まるい顔を隠します

——山^{かじ}膚に響りついて

赤ん坊が泣いています
母親は 叫んでいます

苛^{いら}だつ その二

泣くことなんか無いような
赤ん坊が眠っています
母親は微笑^{わち}っています

月もつられて微笑^{わち}ってみます
すると盪^うの月影に
しがみついて沈^{しず}んだは……

へみんなおまえのせいなの」と
へなんだかきにいらないうたら」と

赤ん坊が泣いています

母親は 叫んでいます
まるいものはみるのもいやと

月にむかってわめいています
猫の眼^めだって風船^{ふうせん}だって
まるかったら太陽^{たいよう}もと

しるし

なっているのは だれでしょう
この子^このことを みんな見ます
それではやっぱり この子^こでしょうか
この子^こははずはないのです
この子は眠^ねっているのですから

電車^{でんしゃ}はとでもこんでいて それだから
苦^{くる}しいよう となっている声^{こゑ}でしょうか

聞いたような声なのです

でも いるはずはないのです
なっているのはだれでしょう

この子のことを みんな見ます

いまは この子は眠っていて

さっきまでは泣いていました

それというのも 毛糸で編んで

この子にはかせた靴下にあいた ちいさな
その穴が痛いよう……と泣くのです

電車はゆっくり走ってます

この子が目をさまさぬように

私は急いでいないのです

何故ならこれから病院へ行くのではないのですから

痛いよう 痛いよう と

私は聞かないふりをします

何故なら まるで知らない人の
なっている声だから

この子のことをみんな見てます

この子が目をさましたから

私の胸にしがみつきます

私の胸に爪をたてます

風のように

いつだったか 少年が蠟石で

わたしを描いたのです

灰色の壁にいていねいに描いたのです

ドラマーはたくましい腕で太鼓を叩くと

灰色の壁が揺れて わたしはころがりてそうです

ピアニストは キイをたくその指で